（別紙３）

公表　事業所における自己評価総括表

○事業所名	児童発達支援センターあはは			
○保護者評価実施期間	令和6年12月1日		～	令和6年12月10日
○保護者評価有効回答数	（対象者数）	４６人	（回答者数）	４０人
○従業者評価実施期間	令和6年12月1日		～	令和6年12月10日
○従業者評価有効回答数	（対象者数）	２６人	（回答者数）	２６人
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年1月10日			

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	・親子通園を行っている	・親子で一緒に通いながら様々な体験ができ、親子で共感できるような保育内容を設定している。保育者が子どもに関わっている場面を見てもらいそれを実際に実践できるような機会を作っている。 ・親子通園やスマイルの会(保護者会）を通して保護者同志のつながりや情報提供ができるようにしている。	・親子の愛着形成を築けるような働きかけをおこなっていく。 ・子どもの育ちをともに確認し喜びあえる場面を設ける。 ・家庭での悩みを引き出し、子育てについての助言をおこなっていく。 ・保護者も子育てをする中での社会の仕組みや他者と関わる上でのマナーなどを学べる機会を設けていく。
2	・家族支援に努めている	・日常的な会話や連絡帳などでの情報から保護者の方の困り感などを見逃さないように心がけ、相談しやすい関係づくりを目指している。 ・保護者の方にしっかりと伝えることができるような資料の作成を心掛けている。	・お子様の状況や保護者のニーズを把握し、日常的に情報を伝えることを徹底し、情報を共有した上での支援が行えるようにしていきたい。 ・保護者の会の活動の協力や、きょうだい児の支援などを今後もおこなっていく。
3	・地域の関係機関と連携を築けている ・地域の関係機関にセンターの周知ができている ・多職種連携ができている	・今年度は地域の中核的役割を担うべく、保育園や幼稚園との連携に努めた。(延岡市巡回相談支援専門員整備事業) ・作業療法士、言語聴覚士、理学療法士、心理士、看護師等専門職を配置したことで、センター内で多職種との連携ができている。	・関係機関のニーズにこたえ、満足してもらえるよう支援の質の向上を図る。 ・専門職のストレングスを理解し、子どもの姿をさまざまな視点から捉え、よりよい育ちができるよう努める。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	・インクルージョンについての取り組みが不充分である	・在籍する子どもへの支援をセンター内で完結することにあえて努めてきた歴史がある。子どものこれからを見据えて将来をイメージすることに欠けている。	・子どもやご家族それぞれのインクルージョンとは何かを考えられる児童発達支援管理責任者の育成に努める。 ・インクルージョンの概念を学び、地域移行支援に向けた取り組みや、乳幼児期の子どもやご家族がどのような力を蓄えれば地域の中で暮らしていけるのかを、相談支援専門員や行政と共に議論できる場をつくる。
2	・専門性のスキルアップが不充分である	・子どもの発達段階を理解するためのアセスメントツールを学ぶ機会や、発達について保育者全員で共通認識を得る機会が不足している。 ・保育者一人一人が専門職だという自覚が低く、自己研鑽をおこなうことへの努力不足。	・今年度に引き続き、心理士、言語聴覚士、作業療法士を迎え、学習会を設ける。 ・知識を実践に生かし、フィードバックができる取り組みを計画する。 ・中核的役割を担っていることへの責務が感じられるような場面を、保育者の経験年数やスキルに応じて意図的に設ける。
3	・保育園や幼稚園、児童発達支援事業所、相談支援事業所へセンター機能の周知ができていなかった	・令和6年度は左記の関係機関を迎えての研修を設け、以前より周知はできたものの、実際に連携している機関は偏りがある。	・こどもサポートステーションきっと(巡回相談)を通して、関係機関への具体的な支援の実績を作り、センターの役割を実感してもらう働きかけをおこなう。